『人文学報』 第100号（2011年３月）
（京都大学人文科学研究所）

序　　論

── 人種表象研究の今後の課題 ──

竹　沢　泰　子

「20 世紀の問題は［白人と黒人を分断する］カラーラインである」とは，1903 年，アフリカ系アメリカ人の知識人の草分け的存在である W. E. B. デュボイスが『黒人のたましい』のなかで述べた，あまりに有名な言葉である。アメリカ合衆国に限らず，世界の諸地域において深刻な人種間対立が続いた 20 世紀を回顧すれば，彼の予言は恐ろしいまでに的中したと言わざるをえない。

それでは 21 世紀の問題とは何なのか。21 世紀の幕開けとともに発生した9. 11 同時多発テロは，「差異」に対する不寛容の時代をもたらした。とりわけ宗教的な差異に対する排斥が世界的に顕在化していることは周知の通りである。しかし単に宗教の次元に留まるのではなく，「生まれながらにして違う」という言説によって，ムスリムの人々などが「人種化」（racialized）されている点に注目したい。

人種の生物学的実体を否定するさまざまな研究が人種理解のパラダイムを転換させてから久しい。人種は，生物学的実体をもたないはずであるにもかかわらず，私たちの日常生活において確固たる社会的実体をもっている。

この小論は，人種表象に関する共同研究の成果である『人種の表象と社会的リアリティ』（2009）および『Racial Representations in Asia』（2011）で展開した議論をさらに深化させるための準備段階として，今後の課題をいくつか覚え書きとして記するものである。

1．海外における「見えない人種」の表象

欧米における人種表象研究では，これまで主に身体上可視的な「差異」を伴う「見える人種」の視覚表象の分析が進められてきた。それに対して，我々の共同研究では「見える人種」

* たけざわ やすこ　京都大学人文科学研究所

のみならず，日本や他の東アジアにおける可視的な身体的特徴が見られない「見えない人種」の存在にも光を当て，視覚表象のみならず，非視覚表象をも取り上げてきた。さらに，非視覚表象として次の二つの類型が考えられると指摘した。第一の類型は，視覚以外の認知的刺激，具体的には嗅覚，聴覚，触覚をとおして知覚される差異が表象される場合であり，第二の類型は，認知的刺激なしに，その差異がまなざしを向ける側に身体化されるような感覚を伴う場合である。後者には，想像上の外的差異，想像上の内的差異，想像上の非人間化された差異があるとしたが，詳細はここでは省略する（竹沢 2009：10－13）。

ここで筆者が注目するのは，第一の類型である嗅覚や触覚を伴う知覚表象である。こういった知覚表象への注視は，「見えない人種」に対する人種主義の再生産のプロセスを検証する上で，きわめて重要である。被差別部落や日本植民地下の朝鮮人といった「見えない人種」の表象とそれを取り巻く問題については，すでに前掲書において黒川みどりや李昇燁が優れた分析を行っている。しかしこういった表象は，日本や他の東アジアに必ずしも特有なわけではない。以下，海外における先行研究や事例をいくつか紹介しながら，その表象プロセスにおいて注目すべき点を指摘したい。

まず，「臭い」をめぐる人種言説は[1]，視覚があらゆる知覚のなかで優先的地位を保持してきたヨーロッパや北米においてさえ，歴史的に絶えず再生産されてきた。しかしこのテーマに関する体系だった研究はきわめて少ないのが実状である。

そのなかで，アメリカ南部の「黒人」の臭いなどの言説を取り上げたマーク・スミス著の『人種はいかに創られるか』（2006）は注目に価する[2]。「例外はあるものの，一般に大衆向けの書物においても学術書においても，人種を視覚的現象としてのみ扱う傾向がある」というスミスの指摘は，まさに我々の問題意識と同種のものである（Smith 2006：2）。視覚的に曖昧な「黒人」は，異人種間結婚の増加により白人になりすます「パッシング」がピークを迎えた1880－1925年頃，急増しつつあった。それゆえに，「見えない人種」となったこれらの黒人（社会的には「一滴の血の法則（ワン・ドロップ・ルール）」により黒人とされた）については，皮膚の色がたとえ「白く」ても，「体臭は残る」とされた。つまり目を欺くことができても，臭いを消すことはできないというわけである。強盗が入った後，家に戻った家主が「これはニガーの臭いだ」と叫んだといった逸話は，こうした表象を具現化したものである。

それでは黒人に独特とされる体臭とは何か。黒人たちの間では，それは食べ物や，独特の香水や整髪用品，肉体労働による汗によるものだと説明される。しかしいずれの階級の白人も，こういった歴史的条件の下に創られた臭いを，生物学的に決定された黒人の特性として定義していたのである。

このような言説が単に偏見にとどまらず人種主義の問題となるのは，それが経済的・政治的利害と結びつくからであるが（竹沢 2005），ここでの事例も例外ではない。スミスによると，

黒人の分厚くきめの粗い皮膚は綿摘みなどのプランテーション労働に適しているといった言説によって，過酷な条件下での労働が正当化された。そればかりではない。強制労働やリンチにつきものであった鞭打ちも，この「分厚い皮膚」の言説と無関係ではなかった。白人対黒人という二分法において，白く美しく，繊細で敏感な肌をもつとされた白人の皮膚をめぐる言説に対置されたのは，黒く醜く，分厚く粗いがために，痛みに鈍感であるとされた黒人の皮膚であった。その彼らに確実に痛みが届くように，鞭をいっそう強く打つ必要があるとされたのである。

こういった嗅覚や触覚に関する知覚表象は，白人と黒人の人種間関係を象徴するものであるが，それだけでは済まなかった。気味の悪いことに，リンチで切断した黒人の指をポケットに入れて持ち歩く習慣が，白人奴隷主の間では珍しくなかった。そこから異臭を放たせながら切断という暴力を介して黒人身体の部位を所有することが，彼らの権力の象徴であったという（Smith 2006 : 23 ; 59 – 60）。

スミスの歴史的検証から，日本における人種表象との類似性と差異が垣間見えてくる。非抑圧集団をめぐる歴史的社会的に条件づけられた差異（臭い，衛生を含む）が，生物的に決定づけられた差異として表象され，人種化されるプロセス。そしてそれが単に優劣関係を明示するだけではなく，これらの支配下におく人々を「適材適所」に配置することによって利潤が生み出されるという，より大きな政治経済の構図である。また臭いをめぐる言説は，さまざまな社会に存在するが，それは臭いが，貧困，不衛生の証とされたり，セクシュアリティと関連づけられたりする場合が多いことと無関係ではないであろう。

アリエラ・J・グロス著の『血が告げるもの』（2008）は，南北戦争前のアメリカ南部における，「白人」にも「黒人」にも分類し難い境界領域の人々の人種の同定のプロセスを，法政史の視点から解明している。これらの境界領域の人々自らがどのようなアイデンティティを抱いていたか，コミュニティはそれらの人々の人種をどのように決定したかについて，裁判における論争に着目した実証的研究を行っている。グロスによると，彼らのアイデンティティは，外見や，社会的地位，祖先の出自，交友関係といったもので固定されていたわけではなかった。普段は，曖昧なアイデンティティのまま，あるいは状況によってアイデンティティを変化させながら暮らしていた。こういった境界領域の人々の存在が人種と人種主義の歴史において重要な意味を持つのは，社会的に周縁に位置しながらもすでに相当数に上っていた彼らの存在が，それと対をなす人種の中心を規定したからであるとグロスは論じる（Gross 2008 : 11）。

グロスの歴史的検証で明らかにされたのは，こういった境界領域の人々の人種が，しばしば，本人の血統やアイデンティティとは無関係に決定づけられていたという事実である。つまり彼らが何者であるかより，彼らが生きる生活空間においてどのような日常行為を実践していたかが，彼らの人種を定義づけていたのである。1848 年に始まったある男性の裁判の事例のよう

に，法廷は，彼の毛髪が縮れ毛か直毛かの判断に迷っても，彼が市民として投票を怠らずにいたか，白人と食事を共にすることを許されていたか，白人と交友関係を持っていたか，あるいは持とうと努めたか，といった白人共同体の一員としての義務を果たしていたか否かを，最も重視した。ただし，こういった人種を決定づける際に用いられた表徴は，ジェンダーによって異なっていた。女性の場合，性的モラルを遵守していたか否かに比重がおかれていたという。

このように，「白人」と「黒人」の境界領域の「見えない人種」の識別を，身体形質といった可視的な表徴ではなく，コミュニティの定義する「善良なる市民」としての義務を遂行していたか否かに求めていたことは，我々の「見えない人種」に関する共同研究にとってきわめて示唆的である。

こういった「異人種間結婚」の進行によって生み出された，境界領域の「見えない人種」に対する人種主義は，現代においてはきわめて現実的な社会問題である。オーストラリアの都市部には，ヨーロッパ系のようにメラニン色素の薄い（「白い」）皮膚の色を持ちつつ，「アボリジニ」としてのアイデンティティを保持している人々が多数存在する。1969年まで続いたアボリジニの子どもたちの隔離政策（最古は1869年に制定された「アボリジニ保護法」）によって，今や「盗まれた世代」として知られるこれらの人々は，幼少期，親や家族から引き離された後，孤児院などの施設に収容され，オーストラリア主流社会への強制的な同化を余儀なくされた[3)]。

2009年，オーストラリアのある著名なジャーナリストが，4篇の記事のなかで，外見が「白人」であるにもかかわらず，アボリジニの芸術家として賞金を受賞するなどしてアボリジニのポストに就いている人々は，個人的な利害に動機づけられた「政治的アボリジニ」であると評した。ある記事では，「研究者やアーティストが，良き将来を迎えるように一つの国民（ピープル）としてまとまる機会を拒むのであれば，（中略）そして代わりに目に見えない差異（differences invisible to the eye）を主張して，白いアボリジニとして登録するのであれば，我々が一つにまとまる余地はどれだけあるのだろうか」と締めくくっている（Bolt 2009）。その後，これらの記事は人種主義的であると厳しく批判され，彼はこれらのアボリジニによる集団訴訟を受けている。この事件について，「アイデンティティは皮膚の色以上のものである」といったバードの指摘通り（Bird 2011），彼のアボリジニの定義は，皮膚の色を基調とした古い人種観に基づくものである。これらのアボリジニの外見が「目に見えない差異」となったのも，強制的同化がもたらした帰結であることは，ここでは忘却されている。「見えない」差異を主張することを慎み，一つの国民として団結するべきであるという美辞麗句の言説の裏に，資源からの排除という論理が働いている。そこに今日の人種主義の一つのかたちが表出している。

現代の韓国においても，「完全に同化し消失した」と言われる被差別集団が存在する。「白丁（ペクチョン）」と呼ばれる人々で，多くの面で日本の被差別部落出身者に類似している。白丁は，朝鮮戦争による混乱と高度経済成長期の都市再開発によって完全に消失した，彼らに対する差別自

体も消失した，というのが，韓国では学術的にも社会的にも支配的な言説となっている。かつて共同体のあった晋州には，衡平運動の記念碑がわずかにその名残をとどめる程度で，地域に居住区の痕跡は残っていない。しかし現代においても，白丁は，例えば劇の台詞や日常会話に「人間白丁」という他人を侮辱する表現として登場する。また自分の出自を知る当事者は，そのほとんどが名乗り出ることを拒むという（金 2003；2010；友永 2010）。

韓国の白丁の現状を，人種主義の消滅として肯定的に評価してよいものか。金や友永は，彼らの表徴の同定が困難になっただけで，当事者が名乗りにくい社会であるなら，白丁に対する差別も白丁自体も消えていないと反論する。同様に「同化」によって差異が不可視化したオーストラリアのアボリジニの多くが，積極的にアボリジニとしてのアイデンティティを主張する状況と白丁の状況が対照をなすのは，数の問題か，歴史的な政策の問題か，人種化されるプロセスの問題なのか —— 安易な比較が可能でないとしても，温めておきたい問いである。

2．人種表象の相互作用

現在進めている共同研究において今後さらに注目したいのは，上記の事例のような視覚表象と非視覚表象の相互作用である。従来の人種表象研究では，身体上の可視的な「差異」がいかに表象されるかに多大な関心が寄せられてきた。そのため，検証に用いられたのは，写真，映画，ポスター，風刺画などの視覚メディアであった。すなわち，視覚で認知される「人種的差異」が視覚メディアをとおして表象されたものが，人種の視覚表象と呼ばれてきたものを指すのである。その媒体には，19 世紀末の印刷技術革新や 20 世紀末のデジタル技術導入など，いくつかの歴史的転換期が訪れるが，一貫してそれぞれの時代において最大限の規模で視覚表象を再生産してきた。

それに対し，臭いや感触，セクシュアリティをめぐる表象は，それ自体は再生不可能であるため，もっぱら人々の語りを通して伝承される。言説表象の媒体は，映画や漫画等の視覚メディアの場合もあれば，文学作品のように活字メディアの場合もある。それによって視覚以外の臭いや触覚に関する表象であっても，広範囲の伝達が可能となる。ラッセルが『日本人の黒人観』のなかで指摘しているように，日本の古典的な漫画作品や文学などに，アフリカ系の人々の身体をめぐる言説は溢れている。

表象の相互作用を条件づける一つの要素として，表象の伝達の範囲や速度の違いが挙げられる。単なるイメージのみで比較的容易にグローバル・マーケットに参入しやすいものなのか，ことばが付随することにより言語圏や流通範囲に何らかの制限がかかるものなのか，といった要素である。かつて『ちびくろサンボ』の復刻の是非をめぐって展開した論争も，この視覚表象と非視覚表象の越境過程のちがいに起因すると考えられる。もともと，ちびくろサンボが生

まれたアメリカでは，これら視覚表象と非視覚表象は，表裏一体，切断不可能な関係にあり，だからこそちびくろサンボは双方ともに，公民権時代の後，急速に姿を消していった。しかし日本は異なる。反対派が，漆黒色の皮膚や，分厚い唇，裸体に近い格好といった視覚表象が意味するもの，「サンボ」という黒人に対する蔑称，物語に投影される奴隷としての従順性などを問題視したのに対し，賛成派は，『ちびくろサンボ』の物語としての面白さ，デフォルメとしての可愛さを主張したのである。視覚表象の記号によって指示されるものは越境により意味を失い，単にデフォルメとしての価値しか持たないものへと転じた。言い換えれば，容易に越境しうるイメージなどの視覚表象と，ことばや文化的コンテクストを伴うがために容易には越境しえない非視覚表象との間の特性のちがいが，ちびくろサンボをめぐる問題意識の乖離を生み出したと言える。

ちびくろサンボ論争から観察されるこの視覚表象と非視覚表象のずれは，現代の「黒人身体能力」をめぐる言説にも当てはまる。川島は，黒人の身体能力をめぐる映画表象の分析（川島 2009）の延長として，本書掲載の論文では，アンケート調査に基づき学生の認識における日米間の差を浮き彫りにしている。川島によれば，アメリカ社会では，黒人は身体能力に優れているといった言説は，すでに時代遅れのステレオタイプであると見なされているのに対し，日本では，そのような言説がまだ優勢である。言い換えれば，視覚表象がグローバルに普及しやすく，黒人アスリートのイメージが「黒人身体能力」という言葉とともに安易に広まった結果，アメリカでは時代遅れとなっているステレオタイプが日本で再生産・補強されているのである。

次に検討したいのは，公共性をめぐる視覚表象と非視覚表象の関係である。視覚表象は，公共空間においてきわめて広範囲にわたり不特定多数の人々によって共有される特性をもつ。対照的に，見えない人種の非視覚表象は，ローカルなレベルの生活空間のなかで，秘密裏に伝承される（竹沢 2009）。今井正監督の『橋のない川』をめぐって表出した議論が示唆的であろう。先の 2009 年の論文集で黒川みどりが，それまでのこの映画に対する否定的評価の再考を促したが，そこで映画のなかの表象が差別助長であるか，差別の実態を表現するものであるかという当時の論争を吟味している（黒川 2009）。主人公である部落の男の子が，恋心を寄せる女の子に手を握られ，想いをいっそう募らせていたにもかかわらず，ある日その女の子に，部落の人の手は，夜になると蛇になると聞いたが，それを確かめたかったからだと告白され，大きな衝撃を受ける。

この描写は差別を助長するものであるとして，今井監督は厳しく批判された。だが，そもそもなぜ，このような感情的反応が生じたのだろうか。それは，本来，部落の人の手が蛇になるという非視覚的な表象である言説が，映画という視覚表象へと変形したことにより起きたものだと考えられる。「見えない人種」であるがゆえに，世代から世代へと語り継がれる言説。多くの場合，それらの言説は文字化されることなく，地域社会の閉鎖的空間の中で，秘密裏に

語り継がれてきた類いのものである。それが映画という公共性の高い媒体を通した表象へと形を変えたことにより，視覚表象と非視覚表象のタブー的交錯がもたらされたと考えることができよう。

3．方法論的課題

次に，これまでの研究会における全体討論を踏まえて，いくつかの検討課題を提示しておきたい[4]。『人種の表象と社会的リアリティ』においても述べたことではあるが，重要な点であるので，再度立場を明確にしておく。表象のかたちや内容を記述することや，表象と実態の乖離を指摘することが，本共同研究の目的ではない。それは古典的なステレオタイプ研究が行ってきたことである。あくまでも表象がいかに社会的リアリティを構築していくのか，そのプロセスを描き出すことに主眼をおいている。

その際の留意点の一つは，誰が誰に向かっていかなる場でどのような目的で語るものなのかということである。それによってエンパワメントや包摂に働く場合もあれば，敵対や排除となる場合もある。差別の助長となるのか，差別の実態を明らかにするのかもそれによって条件づけられる[5]。私的空間で語られたのか，映画等の公共空間で語られたのか，皮膚の色などの視覚表象なのか，臭いなどの非視覚表象なのか等々，変数を変えることにより，何らかの公定式を抽出することが不可能でないかもしれない。さまざまな事例を接合させることにより，最終的にいくつかのパタンが見えてこないだろうか。

さらに表象される身体の差異，表象の媒体などが，どのように政治経済的な利害や社会制度と結びつけられるのか，そのダイナミックな構造的連関性を解明する試みが求められる。例えば皮膚の粗さ・堅さをめぐる口承伝承による言説がプランテーション労働への適性を正当化したり，リンチの写真付きのポストカードを送付したりすることで，白人の権力と優位性，黒人の被支配と劣性が確認されたように。

また，表象の受け手側の解説と解釈をいかに評価するべきかも常につきまとう問題である。人種表象の代表的研究の一つである『表象（Representation）』においてスチュアート・ホールが論じているように（Hall 1997），表象とは，単に発話者の意図だけではなく，発話者と読み手の相互関係により構築されるものである。ただし読み手の解釈については，「誤読」など射程に含めるべき重要な問題があるが，方法論的に読み手の解釈を把握することが常に可能であるとは限らず，そこに表象研究の困難さがある。関口は，「鑑賞した人びとが作品をどのように解釈し，どのようなリアリティを感得したのか。（中略）文学研究や文化研究において取り組まれてきたオーディエンス（視聴者，読者，受け手）研究の手法などを取り入れることで，さらに多くの知見が得られるのではないだろうか」（本書所収の関口論文参照）と建設的な提案を

している。しかし，オーディエンスは果たして特定できるものなのか。個人の集合体として特定可能な場合は，その集合体の代表性の位置づけを明らかにしなければならないだろう。また個人単位での特定ができなくても社会の一部で反応が生じた際，その代表性や解読の影響力をどのように評定するかについても検討が必要である。「個」のレベルと「集合性」がどのように実際につながっているのか，その検証のためには，メディアや抵抗運動が作用する過程をより丹念に見ていく必要があろう。

言うまでもなく，人種表象の研究に一対一の回答は存在しない。また古典的な人種表象の豊富さにもかかわらず，方法論が確立されているわけではない。「表象は問題提起以外の何ものでもない」というあるメンバーの言葉に集約されるように，完璧な表象も，一つの表象に対応する唯一絶対の解読もありえない。解読の多元性を批判的に検証することにより，社会のなかにおける発話者（創作者）と受け手（観客）の多元的な関係性を浮き彫りにすることが可能となるかもしれない。

さらに，人種表象と対抗表象あるいは抵抗表象の関係が，人種のリアリティを補強するのか，まったく新しいものへの代替を試みるのかという問いもある[6)]。これは，マイノリティが公的領域に参入するために人種というカテゴリーを使用するのか，使用するとすればどのように使用するのかといった問題にも通ずる。その問題に取り組んだのが，『人種の表象と社会的リアリティ』のなかの石橋論文，竹沢論文，川島論文であった。

関連して，沖縄人やアイヌの人々，被差別部落のように集団の（推定）人口が小さい場合，対抗表象が社会的リアリティを構築しうるかという問いもある。沖縄人や被差別部落出身者に限るならば，すでに人種主義的な表象によって社会的リアリティをもっていると言えるが，対抗表象となると話は容易ではない。集団内の政治的立場の違い，ジェンダーと集団外結婚など，効果的な対抗表象の立ち上げを困難にする複雑な要素もある。他方，国連の人種差別撤廃委員会が行った日本政府に対する差別是正の勧告（2001年），人種差別撤廃条約の実施状況をまとめた日本政府報告の審査（2010年）などにより，これらの集団の直面する人種差別について国際機関の認知を受けたこと，また，その過程においてトランスナショナルな連帯を組むことに成功していることは特筆すべきである。それ以前にはなかったアイヌによる「先住民」としての対抗表象，あるいは被差別部落の「世系と職業に基づく差別」を受けてきた集団といった対抗表象は，当事者のアイデンティティや社会的な問題の認知に少なからぬ影響をもたらしていると言える。言い換えれば，極小集団の場合でも，国際機関への働きかけやトランスナショナルな連帯構築を進めつつ，新しい対抗表象を立ち上げることにより，その主体を明確にする道が開かれているのである。

4．むすびにかえて

21 世紀に入り，「ポスト人種の時代」を迎えたといわれる欧米圏では，多文化主義がかげりを見せている。公民権運動以後，世界を席巻してきた集合体レベルでのアイデンティティ・ポリティクスに代わって，「個」が強調される傾向が強まっている。しかし中心の権利は擁護・拡大され，周縁に対する抑圧・排除は「自己責任」の名の下に正当化されている今日，人種主義は可視性を薄めただけであると言わざるをえない（竹沢 2009）。

人種を否定することにより，差別是正措置やマイノリティの社会進出を抑止するといった「見えない人種主義」は，水面下で勢力を増している。移動や集団間結婚の増加により，人種識別に使われてきた表徴（身体形質や言語，出身地の地名等）が可視性を失うことによって，あたかも人種主義自体も消滅しつつあるかのような言説が優位となっている。可視的な表徴の消失＝人種主義の消滅と捉え，人種としての主張も人種主義の存続も認めない言説が支配的となりつつある。前述の「白い」アボリジニの人々に対する差別発言のように，もはや「見えない人種」となった人々が差別是正のために設けられた人種の枠で権利を獲得することに対して，社会のなかの不寛容な分子が，公然と立ち現れる事態が生じている。「見えない人種」が社会的に何の脅威ももたらさない「見えない」存在である限り，人種主義は消えたかに見える。しかし彼らが人種としての権利を主張し始めると，たちまち人種主義が水面下から姿を現すのである。

この「見えない人種」と「見えない人種主義」の関係は，今後も注視し続けたい課題である。

注

1）『感染地図』を表した S. ジョンソンによると，2003 年の脳の実験で，強い臭いは，恐怖や悲しみの感情を発する扁桃体と，食欲やのどの渇き，吐き気といった生理的欲求を司る腹側線条体（ふくそくせんじょうたい）の両方を活性化させることが，画像を通して明らかになった。これら扁桃体と腹側線条体は，脳の警報中枢を成すので，理性をシャットアウトする働きがあるという。そのため，「理性的に考えるという回路を通らずに，そのにおいに関連するものを避けたいという強い欲求を作り出す」とジョンソンは説明している（ジョンソン 2007：132－133；138－139）。強い臭いを嗅ぐといった刺激が理性をシャットアウトし，一種の生理的嫌悪感ともいえる反応を導きだすか否かをさらに検証するには，脳科学や生理人類学の知見を借りる必要があるが，興味深い論考である。

2） 共同研究メンバーの貴堂嘉之氏のご教示による。

3） 2008 年，ラッド首相（当時）が，盗まれた世代に対して初めての公式謝罪を行ったことは記憶に新しい。

4） 以下は，2009 年 10 月に行った『人種の表象と社会的リアリティ』の合評会，および 2010 年

4月と8月に行った新共同研究の方向性についての全体討論を土台としている。個々の発言者のお名前を記載していないが，今後の共同研究の方向性を探る上で重要な指摘であったので班長として論点を整理した。これらのヒントとなる発言を頂いた研究班のメンバーの方々に感謝申し上げる。

5） 当然ながら，当事者のテキストなのか，当事者以外のテキストであるかは基本的な指標の一つとなるが，誰が当事者なのかについても明瞭（な区分線が引けるもの）ではなく，議論が必要である。

6） 南川文里は，対抗表象について，既存のリアリティに代わる新たなリアリティを作りだそうとする実践なのか，人種表象と対抗表象は相補的に人種のリアリティを構築するものなのか，それらの関係について明らかにする必要があると述べている（南川 2010）。それについて，筆者は次のように考えている。小文字の race，大文字の Race，抵抗の人種（race as resistance＝RR）が，人種概念の三つの位相となり，それらが互いに絡み合って一つの球のように人種概念を成している（竹沢 2005）。古典的な大文字の Race をなぞった抵抗の人種は，それが戦略的本質主義であれ，差別是正のための必要悪であれ，人種のリアリティを構築・補強する傾向が強い。それに対して，既成の人種概念やカテゴリーを撹乱させる対抗表象は，表象の固定化自体を拒絶するものである。

引用文献

金 仲燮　2003 『衡平運動 —— 朝鮮の被差別民・白丁その歴史とたたかい』 高 正子 （翻訳） 大阪：解放出版社

金 仲燮　2010 「韓国の白丁について —— 起源・社会的排除・闘争・現状」“About Peakjong in Korea : Origins, Social Discriminations, Struggle and Current Situation” 京都大学人文科学研究所 人種表象の日本型グローバル研究 9 月例会「アジアにおける被差別民と不平等」報告

竹沢泰子編　2005 『人種概念の普遍性を問う —— 西洋的パラダイムを超えて』人文書院

竹沢泰子編　2009 『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店

友永健三　2010 「『世系』，『職業と世系』に基づく差別と部落差別についての若干の考察」京都大学人文科学研究所　人種表象の日本型グローバル研究 9 月例会 「アジアにおける被差別民と不平等」報告

南川文里　2010 「書評　竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』（岩波書店，2009 年）」『移民研究年報』16 号，149－152 頁。

ジョン・B・ラッセル　1991 『日本人の黒人観 —— 問題は「ちびくろサンボ」だけではない』新評社

Bird, Dyian, 2011, “Aboriginal identity goes beyond skin colour”, *The Age*, April 6, 2011.

Bolt, Andrew, 2009 a, “White is the new black,” *Herald Sun*, April 15, 2009.

————, 2009 b, “White fellas in the black,” *Herald Sun*, April 21, 2009.

Gross, Ariela J., 2008, *What Blood Won't Tell : A History of Race on Trial in America*. Cambridge, MA : Harvard University Press.

Smith, Mark, 2006, *How Race is Made : Slavery, Segregation, and the Senses*. Chapel Hill : University of North Carolina Press.

Takezawa, Yasuko ed., 2011, *Racial Representations in Asia*. Kyoto : Kyoto University Press.

要　旨

この小論は，人種表象に関する共同研究の成果である『人種の表象と社会的リアリティ』(2009) および *Racial Representations in Asia* (2011) で展開した人種表象についての議論をさらに深化させるために，その準備作業として今後の課題をいくつかを素描するものである。

最初に，日本の「見えない人種」の表象との接点を見出すために，海外の事例をいくつか紹介しつつ，表象のプロセスにおいて注目すべき点を指摘する。ここで取り上げるのは，南北戦争前のアメリカ南部で「白人」「黒人」の境界領域にいた人々や，現代のオーストラリア社会に存在する，「白い肌」をもつアボリジニの人々などである。「白人」との集団間結婚の繰り返しにより，身体的可視性を失い「見えない人種」となったこれらの人々を，コミュニティやメディアはどのように同定し，表象するのかが明らかにされる。

次に，人種表象，とくに視覚表象と非視覚表象の相互作用がもたらすいくつかの興味深い現象に目を向ける。最後に，これまでの共同研究会における議論を踏まえて，検討を要する課題のいくつかを記すことにより，今後の発展につなげたい。

Summary

This essay sketches our next steps to further elaborate on the discussions on racial representations developed in *Racial Representations and Social Realities* (2009) and *Racial Representations in Asia* (2011) as the results of our collaborative research project.

First, I point out some pronounced representational processes taken from overseas examples in order to find the nexus with Japan's representations on "invisible races." The cases include the people in the borderlands between "white" and "black" in the antebellum American South and "white skinned" aborigines in contemporary Australia. I attempt to clarify the ways in which communities and media identify and represent those people who have become "invisible races" due to repeated inter-group marriage with "whites" over generations.

After moving to the curious phenomena derived from the mutual effects of both visual and non-visual representations, the essay concludes by noting issues in need of further discussion. It is my hope that our research, built on past dialogue among our collaborators, will continue to develop.